

母のめざまし

はそべただし

二時といえば二時に
三時と頼めば三時に
びちりとめざめる
母であつた。

姉が町の工場へ通うときも

二年間の四時起きに

一回の狂いもなかった。

めざましがなかったから

できたのか

できたから

めざましがなかったのか。

羽曾部 忠氏は、昭和四十四年秋に、第四回福島県自由詩人賞を受賞された方です。審査委員長田中冬二氏は、

「全然技巧を用いず、粉飾もなく、素朴一点ばりの素直さ。大らかに農民のもつヒューマンな美しさ、大地に根を張った生命力の強さを歌い出している」と評しておられます。自费出版された「羽曾部 忠詩集」のあとがきを少し次に掲載させていただきます。

私の義理のおばさん、とは言いましても、もうすでに七十歳の坂を越え、腰が曲がり、片方の足のひざの屈伸もままならぬ人ですが、この人は山里に生まれ育ち、ねっからの山ずき、山へ行けば少しぐらいの病氣や悲しみなど、いっぺんに吹っとなでしまうというほど。

(中略)

帰省したある時、運よくもおばさんに

遠足のときでも

運動会のときでも

あのことろ

精巧きわまりないめざましが

母のどこかでしつかりと

セコンドを刻み続けていた。

今、

七時起きの子の孫の

朝ごはんにもようやつと

めざましは

すっかりさびついている。

出くわして山の話をつうかがったのですが、季節の運行につれて、遠くから山肌を見ただけで、ワラビやゼンマイやキノコなどのありかが、びたりとわかるというのには、驚きと同時に一種の名人芸をさえ感じさせられました。

あこがれてとび出してきた東京に、日増しに失望がこくならうとする時、からだでつかみとった老人の、このような知恵にぶつかり、と、ふるさとへの思慕とからめて、どうしてもこれを書き残したいという思いが、少しずつ強まっていきました。

以下略

今の時代にだんだん失われていくものを、必死に残そうと書かれているような詩のかずかずを、著者の許可をいただきましたので、これから折にふれてご紹介していきたいと思っています。